

照葉樹林研究フォーラム 開催

綾町の取り組みの歴史と現在を事例発表します。
現状を理解し、「綾ユネスコエコパーク」の未来を
考えよう!

※運営ボランティアも同時募集中です。

日時:2013年7月6日(土)

13:30~16:40

場所:綾町高年者研修センター

※スリッパをご持参ください

お申し込みは「てるはの森の会」まで。

事務局だより

◆てるはの森の会 関連行事

終了した行事

- 1月 12日(土) 講習会「モグラが教える生物多様性」
- 13日(土) 木育年間講座「本立てを作ろう」
- 15日(火) 第17回連携会議
綾プロ事業説明会
- 28, 29日 李道ふれあい調査
- 31日(木) 第10回地域づくりワーキンググループ
- 2月 3日(日) 沼田眞賞授賞式(上野登)
- 15日(金) 林床植生調査ボランティア
第11回連絡調整会議
- 16日(土) 第12回照葉樹林復元ボランティア
- 19日(火) てるはの森の会 定例会
- 23, 24日 ユネスコ広報担当 綾町視察
- 24日(日) 冬の生きもの観察会inげんだぼの森
- 3月 5日(火) 第11回地域づくりワーキンググループ
- 13日(水) 第12回連絡調整会議
- 15日(金) 講習会「眠っている生きものを呼びませ」
- 20日(水) MRT環境賞表彰(上野登)
- 4月 3日(水) 日高時計店より寄付金授与式
- 16日(火) てるはの森の会 定例会
第1回地域づくりワーキンググループ
- 23日(火) 第1回連絡調整会議
- 5月 10日(金) 生物調査者 意見交換会
- 14日(火) げんだぼの森草刈り作業
- 16日(木) 第2回地域づくりワーキンググループ

今後の予定

- 5月 21日(火) てるはの森の会 定例会
- 22日(水) 箱根山御山組合 綾町視察対応
- 23日(木) エコパーク0会
第2回連絡調整会議
講習会「ホタルが教える生物多様性」
- 24日(金) 大森岳データロガー回収同行
- 28, 29日 エコパーク1周年記念イベント説明会
- 29日(水) 李道ふれあい調査
- 6月 17日(月) 綾町生涯学習講座
- 26日(水) 第3回連絡調整会議
第18回連携会議
- 7月 6日(土) 照葉樹林研究フォーラム
- 7日(日) 綾ユネスコエコパーク専門委員会
- 11 - 15日 綾ユネスコエコパーク登録1周年記念イベント
- 12日(金) 綾町生涯学習講座



げんだぼの森で初めて開催した
生きもの観察会の様子(2月24日)

◆日高時計本店より、ご寄付をいただきました! (4月3日)

てるはの森の会の前身「宮崎照葉樹林ネットワーク」が2002年7月に
スイスの時計メーカー「オーデマ・ピケ財団」と植樹イベントを行ってから
ご支援いただいています。今回は、オメガのスピードマスターの抽選会
参加費を全額寄付していただきました。

当会は、会員の皆様の有形・無形のご支援により運営されています。
ありがとうございました。

協賛企業



会員募集中!

「てるはの森の会」では、綾の照葉樹林プロジェクトにご協力いただける会員を募集しています。
会員になっていただくと、照葉樹林やプロジェクトに関する情報を掲載した「照葉樹林だより」を年4
回お届けします。プロジェクトが実施するイベントや各種行事に参加できます。詳細は事務局までお
気軽にお問合せください。

	年会費
個人会員	2,000円
家族会員	3,000円
団体会員	5,000円
法人会員	10,000円

照葉樹林だより

ISSN 1880-8794

てるはの森の会 会報第33号
2013年5月20日



輝く森 4月下旬、綾の森にシイの花が咲きはじめると、森は急に照葉樹林ならではの華やかさを増してきます。(撮影 坂元守雄)

研究 第4回 九州地区ニホンカモシカ特別調査を終えて 岩本俊孝

…4-5p

いのち豊かな綾づくりプランに向けて ……2p

てるはの森の会代表 上野登 ……7p

佐々木高明さんと綾 ……3p

沼田眞賞、MRT環境大賞 受賞!

綾の森の沢調査◎綾の森のヤマネの生活 ……6p

事務局だより ……8p

発行:てるはの森の会(綾の照葉樹林プロジェクト事務局) 〒880-0014宮崎県宮崎市鶴島2-9-6 みやざきNPOハウス403号

TEL 0985-35-7288 / FAX 0985-35-7289

E-mail: teruha@miyazaki-catv.ne.jp ホームページ: http://www.teruhanomori.com (フェイスブックも情報発信しています!)

いのち豊かな綾づくりプラン に向けて

これから、綾町の生物多様性地域戦略*づくりが始まります。

(公財)日本自然保護協会 道家哲平

私は、これまで(公財)日本自然保護協会(以下、NACS-J)の国際担当として、国際会議への参加・情報収集やIUCN国際自然保護連合の日本の連絡窓口としての世界と日本との関係を作ることに関わってきました。そんな私が、2012年夏の終わりから綾町の生物多様性地域戦略(以下、地域戦略)づくりを手伝うために関わるようになり、今は、綾町の自然、綾の照葉樹林プロジェクト(以下、綾プロ)の活動・調査への参加、有機農業などの環境配慮の取り組みなどを学んでいるところです。

きっかけは、ユネスコエコパークです。2011年頃からユネスコエコパークへの審査・登録へと進む中で、綾プロが主に対象とする奥山だけでなく、綾町全域での地域の人と自然の関わりをどうしていくか考え、共有することが必要ではないかという意見が綾プロ関係者の中で起こりました。NACS-Jの方でも、その前年から生物多様性を活かした地域づくりにこの地域戦略という仕組みが使えるのではないかと考え、全国各地の情報収集や専門家へのヒアリングを行い、地域戦略づくりのガイドブックをまとめたところでした。そこで、環境省・地域生物多様性保全活動支援事業に応募し、綾町・NACS-J・てるはの森の会の三者で綾生物多様性協議会(以下、協議会)を立ち上げ、2012年から地域戦略づくりを検討することとなりました。協議会では、まず綾にどんな自然があるのかを知るための生きもの調査、自然を体験するための生物多様性再生区域づくり、エコパークに登録された綾の今後の方向性を決める地域戦略づくりの3つに取り組んでいます。

NACS-Jは、自然へのまなざしを持ちつつ、地域の意見・参加を大事にします。そして、その地域の声をうまく形にしていけるために、外からの視点で整理し、まとめる際の手伝いをするという立場になるのではないかと思います。原稿タイトルの「いのち豊かな綾づくりプラン(以下、綾づくりプラン)」も、生物多様性地域戦略という言葉では堅い・難しい印象を与えるので別の呼び方にしようと色々話し合う中で出てきた言葉を紡いだ表現です。

具体的なことはこれからです。新しい何かを作るのではなく、自然生態系農業の推進に関する条例を全国で初めてついたり、照葉樹林を守り続けてきた綾の歴史・想いに形(言葉)を与えて次代に引き継げるようにするための「綾づくりプラン」としていきたいと思っています。これまで比較的都市部でつくられてきた地域戦略にはない発想で、綾でそれを実現できたなら、持続可能な地域を作っていきたいという多くの市町村のモデル事例となることでしょう。

また、「綾づくりプラン」を世界に発信しやすい形で作っていききたいと思います。ユネスコエコパークは、人と自然の関係をより良いものに変えていくためにモデル地域として取り組むことを期待され、世界から選ばれる地域です。例えば、「綾づくりプラン」と生物多様性の世界目標である愛知目標との関わりを明確に示すことなどは、日本から他の地域のエコパークに伝えていくべき事例になるでしょう。(どうけてっぺい・東京都)



綾町役場裏湿地の「再生多様性再生区域」(3月14日、ボランティアのご協力で、モニタリング調査のための草抜きをした。)



5月10日、生物調査を受けている宮崎県在住の調査者を集め、意見交換会を開催した。



5月23日、「生物多様性」の認識を広めるため、「ホテル」を題材に綾町全道地区で講習会を開催した。(生態のお話:串間研之さん)

*生物多様性地域戦略とは、2008年に制定された生物多様性基本法第13条で地方自治体に策定努力を義務付けたものです。

佐々木高明さんと綾

会員 小川渉

照葉樹林文化研究の第一人者の佐々木高明(ささき こうめい)さんが、2013年4月4日に亡くなりました。83歳でした。

佐々木さんは、生涯で2度、綾に来られました。最初は1985年、第1回「照葉樹林文化シンポジウム」の基調講演者としてでした。このシンポジウムは、当時の郷田實町長の要請を受けた上野登・宮崎大学教授が、今西錦司、上山春平両氏ら京都大学関係者と調整して実現したものでした。

この時、佐々木さんは完成間もない綾の照葉大吊橋から森を眺め「今後20年間この姿が維持されれば大したものになるだろう。」と述懐されたことが記録されています。(上野登ほか著『照葉樹林文化論の現代的展開』2001年)

2度目は2002年。「鉄塔問題」(九州電力の高圧送電線計画が綾の照葉樹林に影響することを懸念した住民の反対運動)で揺れている最中でした。

運動の中心を担った郷田美紀子さんが「声高にスローガンを叫ぶより、とにかく自然の懐に飛び込む機会をつくれれば、何が大切か分かってもらえる。」(宮崎日日新聞2002年4月17日付)との発想で、第5回までで途切れていた「照葉樹林文化シンポジウム」の再開を企画したものでした。その萌芽は前年に手づくりで行った川中キャンプ場での集いにありました。本格再開の講師は、佐々木さんしかいないとの思いで、私は京都に出向き、面会しお願いしたものでした。

17年ぶりに照葉樹林と向き合った佐々木さんの描写が印象的です。「先生は森にかけられた橋の真ん中に立たれ、深々とお辞儀されて『よくぞ残してくださった。よくぞ残してくださった。』と幾度も幾度もつぶやかれました。」(郷田美紀子「増補版・結いの心」2005年)

その後、2011年「国際照葉樹林サミット」、2012年「綾ユネスコエコパーク登録記念式典」など来ていただくべき場面はありましたが、体調の関係で辞退されました。残念でありませんが、綾の照葉樹林の恩人として佐々木高明さんの名前は永く記憶されることでしょう。

(おがわわたる・綾町)



【宮崎日日新聞 2002年4月17日付けより】

2013年3月3日、京都府亀岡市「第12回生涯学習賞」において、てるはの森の会は生涯学習共生賞を受賞しました。選考委員をされている佐々木高明さんより推薦を受けて受賞したもので、最後まで佐々木さんから、綾は温かい応援をいただきました。

ニホンカモシカ特別調査を終えて

宮崎大学 岩本俊孝

1. はじめに

平成23～24年度にかけて、国の特別天然記念物ニホンカモシカ(以下、カモシカ)の第4回九州山地特別調査が、大分県・熊本県・宮崎県3県合同で実施されました。そして、今年の3月にその報告書をまとめました。ここでは、その報告の概要と、綾川流域における分布や生息環境の特徴について述べてみたいと思います。

その前に、まず調査方法について述べておきます。調査は5名～10名くらいのチームで行います。メンバーは横に5メートルの間隔をとり、並行に一定の距離歩きます。その際、自分の両端2.5メートル(合計5メートル)の範囲にある、カモシカの糞塊を探します。すると、一定の面積(人数×5m)を皆で歩いた場合の、糞塊の密度が出ます。その密度をある式に代入しますと、カモシカの生息密度が出て来ます。1カ所だと誤差が大きくなるので、同じ地域で多くの調査区画を取ります。その平均値を生息密度として使う訳です。生息頭数は、一定の条件を満たす山地の広さに、その地域で得られた生息密度の平均値を掛けて、計算します。

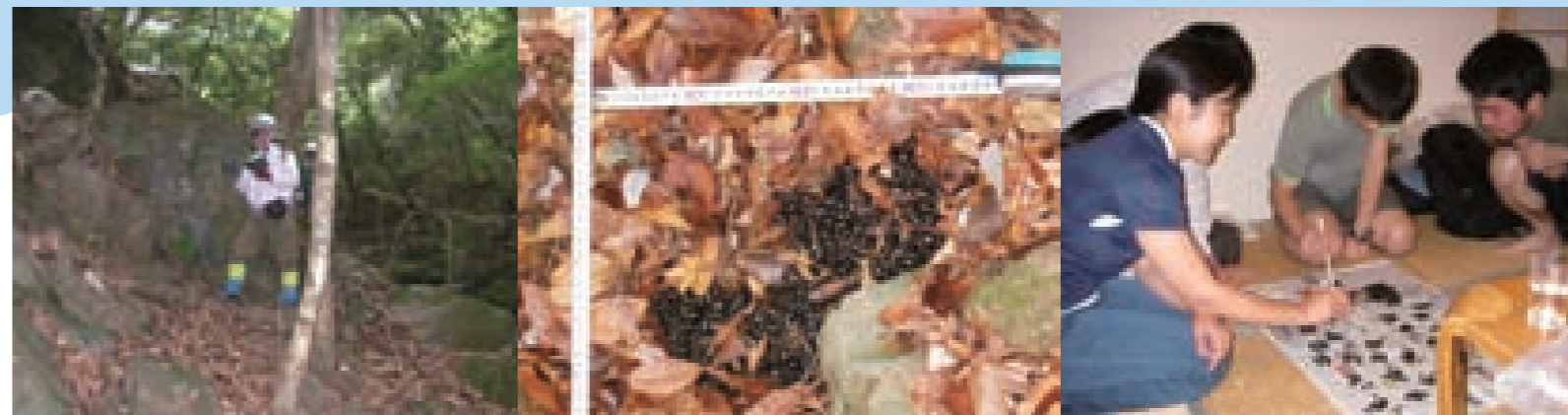
2. 調査結果の概要

さて、全体の生息状況についてですが、前回(第3回、平成14～15年度に実施)の特別調査では、前々回(第2回、平成6～7年度に実施)の調査時の推定頭数1449～2208頭から大幅に生息数が減少して、489～643頭になっていることが報告されていました(推定頭数の幅は計算法の違いによります)。今回の全生息数の推定値は566～812頭と、前回に比べ少しだけ増加気味になっているという結果になりました。ただ、調査上の推定精度などを考えると、この増加分は誤差の範囲だろうというのが、私たちの認識です。

今回の調査結果から言えるもう一つの生息状況における特徴は、分布地の分散化と低標高化です。この傾向は第3回の調査結果から伺っていたのですが、今回はそれがより顕著になりました。昔からカモシカは深山幽谷に棲む動物と考えられており、主要な生息地は1000メートル以上の岩崖(通称ダキ)のある山地だと考えられていました。しかし、今回、1000メートル以上の昔の生息地では、カモシカの糞がほとんど見つからず、そこは「もぬけの殻」の状態でした。そして、カモシカの糞が高密度に見つかったほとんどの場所は、かなり人里に近い低標高の調査地でした。当然、そのような低標高地には、カモシカの生息に適したダキは小規模にしか存在しないので、一か所の生息個体数は少なくなります。従って、点々と分散して生活することになる訳です。

このような大規模な生息環境の変化はなぜ生じたのでしょうか。今回の報告書では、この理由の解明も試みました。第3回特別調査時から大体想像はしていたのですが、どうも高標高地におけるシカの増加による生息環境の荒廃が主な原因であろう、という結論に至りました。第1回特別調査時(昭和62～63年実施)には、高標高地のシカの生息は目立たなかったのですが、第2回目調査のころから、高標高地でシカを見るようになり、第3回目ではシカによる林内の下層植生の破壊が著しくなって、いわゆるディア・ライン(シカの背が届く高さまでの植物が全くなくなる状況)が明瞭に見られるようになりました。そして現在では、シカにとっての餌もなくなっている状態で、高標高地でもシカの密度が大幅に下がっています。すなわち、シカもカモシカも高標高地にいないのです。

他にも、カモシカの密度を下げてきた原因があります。例えば、皮膚病(ヒゼンダニによる疥癬)の蔓延、シカ防護柵にかかって事故死するカモシカの多さなどです。低標高に分散して生息している現在のカモシカは、一



調査の様子

カモシカの糞

カモシカの糞を数える

緒に低標高に降りてきたシカと、再度、競合する状況に置かれています。今後は、低標高地におけるカモシカの生息地の状態を、注意深く監視して行く必要があります。

3. 綾川流域におけるカモシカの生息状況

綾の山地は、カモシカの日本における分布南限地域となっています。第1回特別調査時には、ちょうど、綾の大吊り橋の対岸(左岸)側の林が南限地でした。その後、綾南川をカモシカが南側に渡ったらしく、第2回調査時には綾南川の右岸の峰を超えた位置にある広沢ダム上流部で糞塊が発見されています。第3回、4回の特別調査ではそこでの糞塊の発見はありませんでしたが、今回、綾の大吊り橋に行く途中の道路崖上(綾南川の右岸にあたる)で、大きな糞場が発見されました。この場所の発見で、一躍、綾のカモシカ平均密度が上がりました。この地も標高わずか100メートル程度の山林であり、低標高化を示す一つの代表的な生息地となっています。なお、綾南川からの支流のひとつである多古羅川の渓谷でも糞塊密度が高い場所が見つっています。また、綾吊り橋から川中神社にかけての川沿いに続く遊歩道では、これまで頻りにカモシカの姿を見かけたという情報が得られており、綾南川流域の照葉樹林帯は、その地形の急峻さとあいまって、日本における南限地の重要なカモシカ生息域を形成していると思われます。

他方、それ以外の調査区ではかなり厳しい状況であることが分かりました。特に大森岳へと続く大森岳林道周辺の照葉樹林は、かつて重要な生息地でしたが、今回の調査ではカモシカの糞は一つも発見できませんでした。先に述べたように、この標高の高い林ではシカによる下層植生の破壊が著しく、明瞭なディア・ラインの存在が認められました。また、道路際や伐採地にはマツカゼソウやカナワラビ類という、シカの忌避植物が繁茂しており、シカによる採食圧の高さを感じさせる植生でした。同様に、綾北川から掃部岳方面に伸びる谷でも、綾北川の上流部にあたる田代八重周辺でも、また釈迦岳や矢筈岳周辺でもカモシカの糞はほとんど発見されませんでした。これらの土地は、昔はかなり多くのカモシカの糞が発見されていた場所です。多分、これらの土地でも、シカによる下層植生の破壊が大きな原因となり、カモシカの生息が難しくなったのだらうと思われます。

綾北川の鷺巣から古賀根橋ダムの間の左岸・右岸とも、昔は多くのカモシカの糞が見つっていた場所ですが、今回の調査では道路不通のため調査区を設定できなかったのが、残念です。これら川沿いの急傾斜地は、最近人もあまり入っていないので、昔同様、カモシカが生息を続けているのではないかと思います。

以上、綾川流域の調査結果を詳しく述べました。綾地区でも、九州の他の土地と同様に、カモシカ生息地の分散化、低標高化が明確でした。言い換えれば、カモシカの生息地は人里に非常に近いところに存在するようになっている訳です。それだけ、危険も増えています。日本の貴重な特別天然記念物であるカモシカの保護の在り方は、新しいフェーズ(時代)に入ったと言ってもよいと思います。今後、皆様のご協力で、カモシカの南限地をさらに北上させることのないよう、活動して行きたいと思ひます。(いわもととしたか・宮崎市)

綾の森の沢調査⑥

綾の森のヤマネの生活

会員 林裕美子

溪流の水の中にある虫の多くは、成虫になると翅が生えて水の上や森の中を飛び回ります(たとえばカゲロウやユスリカ)。この成虫を調べるために、沢の脇に羽虫をつかまえる網を張りました。虫は、80%アルコールが入った容器に落ちる仕掛けになっています。2012年6月1日に2週間ぶりに容器を交換しに行くと、虫と一緒にヤマネが1匹アルコールの中で死んでいました。

ヤマネは、高い木の上で柔らかい木の実や虫を食べ生活しているネズミの仲間です。体の長さは10cmくらい。細い枝から枝へと飛び移りながら移動します。夜行性なので、森の中で何を食べているかを調べるのは工夫がいります。天然記念物をつかまえてはいけませんが、今回の事故死は仕方ありません。滅失届けを役所に出して、剥製標本にして博物館に収めることになりました(写真1)。剥製にするときに、胃だけ摘出してもらい、何を食べていたかを調べることにしました。

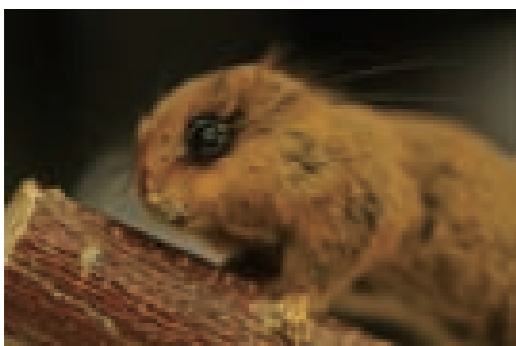


写真1. 剥製になったヤマネ (撮影:小此木宏明)

小さな胃でした(2cmくらい)。ナイフで切り目を入れて、中身を80%アルコールを入れたシャーレに移し、形や色調が似たものを分けました。黒と灰色のまだらな虫の殻みたいなものが一番たくさんありました。これにはY字型の突起がたくさんあり、筋肉のようなものがたくさんついていました(写真2)。そこで、ヤマネを発見したときにトラップにかかった昆虫類を調べたところ、ナミテントウの幼虫の背中のY字型の

突起が、ヤマネの胃の中の断片とそっくりでした(写真3)。このことから、ヤマネはナミテントウの幼虫を食べた直後に死んだと考えました。

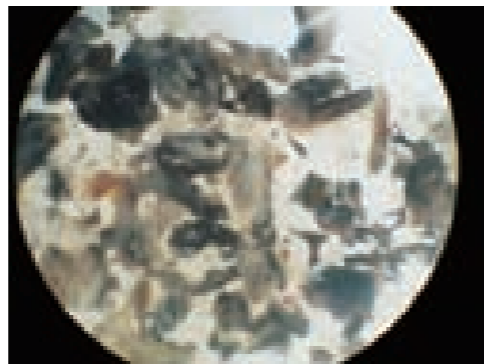


写真2. ヤマネの胃の中のナミテントウ幼虫の断片



写真3. 昆虫トラップでヤマネと一緒に捕獲されたナミテントウの幼虫(背中の突起が決め手)

ナミテントウは、幼虫も成虫もアブラムシ類(アリマキ)を食べるテントウムシです。ヤマネに発光器を背負わせて夜の森を追跡した長野県での観察では、ヤマネは樹上でアブラムシ類を食べると報告されています。そのとき、もしかするとアブラムシと一緒にテントウムシの幼虫も食べていたかもしれません。

胃の中には、ほかにもナミテントウの成虫、ハエか蚊の仲間、小さな甲虫といった虫の体の断片があり、コケ類(コバノイトゴケとリボンゴケに似ている)も混じっていました。ヤマネはコケを巣に敷くことがわかっています。コケを巣に運ぶときに間違っただけなのでしょう。沢の水生昆虫の調査から、森のヤマネの生活をかいま見ることになりました。

(はやしゆみこ・宮崎市)

てるはの森の会 代表 上野 登

沼田眞賞(公財)日本自然保護協会)

MRT環境大賞(MRT宮崎放送) 受賞!

事務局 相馬 美佐子

本会代表、上野登が、2月3日に沼田眞賞((公財)日本自然保護協会)、3月20日にMRT環境大賞(MRT宮崎放送)を受賞しました。この機会に宮崎県の自然保護の歴史とも言える、上野登の60年に渡る業績を紹介します。

上野は1926年、福岡県に生まれ、九州大学経済学部卒後、1952年に宮崎大学教育学部で教鞭をとるため、来県しました。上野が森林に関わりを持ったのは、1954年林野庁の「国有林野地元状況実態調査報告書」の執筆でした。1965年には「日向木炭経済史」の後編「日向木炭の展開構造」を執筆し、宮崎県北部は木炭生産後の森林を天然萌芽で再生させ、県南は部分林としてオビスギを植えて行くという歴史を知りました。

山が好きだった上野は、宮崎大学山岳部長、宮崎県山岳連盟会長を務め、1968年大崩山に学生と行き、大崩山荘前の奥の谷まで林道が迫り、伐採計画が持ち上がっていると知るや、日本自然保護協会九州支部(岩切章太郎支部長)とともに大崩山の原生林保護運動を展開しました。1972年施業計画の凍結に成功した後、大崩山は1980年に森林生態系保護地域に指定され、宮崎県を代表する山として親しまれています。この大崩山の原生林保護運動が発端となり「宮崎の自然を守る会」が誕生し、「宮崎の環境を守る連絡協議会」へと発展、全県的な自然保護運動が展開されました。

1972年に宮崎県は、中霧島有料道路計画の環境調査を宮崎大学に依頼し、国立公園の中央を有料道路が横断する計画は不適切である、と調査結果が出されました。調査に参加した上野は「宮崎の環境を守る連絡協議会」として抗議運動を行い、環境庁(三木武夫長官)に陳情、その後計画は消滅しました。

上野が綾町と関わるようになったのは、照葉樹林の保護行政に取り組んでいた郷田實綾前町長の依頼で、1985年に照葉樹林文化シンポジウムを実施し、綾町の照葉樹林都市宣言に立ち会ったことによります。その後、川内原発に関する小丸川揚水発電所の送電鉄塔が綾の森を通る計画が浮上し、その計画を止めるねらいから、2002年「綾の森を世界遺産にする会」が結成され、代表として署名運動を行い、14万人の署名を集めました。綾の森は、2003年の世界自然遺産候補地検討会で最終選考に残ったものの、候補には選ばれませんでした。照葉樹林面積が狭いと助言を受け、2004年『再生・照葉樹林回廊』(鉱脈社)を発刊し政策提言を行いました。2005年九州森林管理局が民間と協働で行う綾の照葉樹林プロジェクトが発足し、「てるはの森の会」の代表として参加し、現在も代表として活躍中です。

上記活動の他、高千穂町土呂久地区の砒素中毒被害者の会「土呂久・松尾等の砒素被害者を守る会」の代表を1984~1992に、「アジア砒素ネットワーク(AAN)」の代表を1997~2012に務めたことも受賞につながりました。

(そうまみさこ・宮崎市)



2012年度 MRT環境賞表彰式にて(下段左から2番目が上野登)